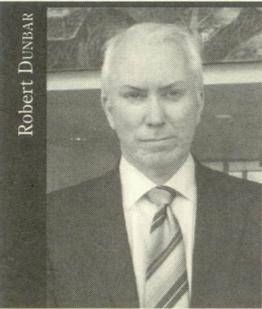


SCOTTISH CULTURAL REVITALISATION

スコットランド文化の再活性化

Robert DUNBAR

ロバート・ダンバー



[プロフィール]——スコットランド・ハイランド島嶼大学スカイ島校研究教授。少数言語の言語政策の法律分野における世界的先駆者の一人で、同校等が関係するスコットランド語文化の保存・再活性化に向けた研究プロジェクトの責任者を務めている。カナダのノヴァスコシア州で話されているスコットランド語の話者であり、研究領域は、社会言語学、スコットランド語（およびその他のケルト語）の言語政策のほか、18、19世紀のスコットランド語による詩歌、口承物語、カナダにおけるスコットランド語文学・文化など多岐にわたる。欧州評議会の委嘱研究者で、欧州地域語少数言語憲章事務局とも定期的に連携しており、これまで少数言語政策に関する国際的諸機関、各国政府、NGOの顧問を歴任。2005年のスコットランド語法に基づいて設立されたスコットランド語評議会の委員、BBCスコットランドと共同してスコットランド語番組を制作する機関の委員、スコットランド語文献協会会長、電子媒体雑誌「北部スコットランド」の編集委員などを務める。

「文化」とは意味の広い言葉であり、日々の生活のあらゆる側面に関わるものです。本発表で扱う「文化」とは狭い意味のものです。ここでは、さまざまな文化活動を支援し、その文化活動の伝承、公開を支援している団体、そしてメディアに焦点を当てたいと思います。このように限定するのは、発表の時間が限られており、また私自身の専門知識も不足しているからです。私は、スコットランド・ゲール語の文学、文化が専門であります。スコットランドの

その他の文化については、きわめて主観的な意見を持っているに過ぎませんので、それをわざわざ披露する必要はないと思います。スコットランド文化全般に関する専門的な知識を持っていたとしても、多くを述べても仕方ありません。というのも、どのような文化であれ、その〈文化力〉を測るのは容易なことではありませんし、何を言ったとしても、それは価値観によるもので、主観に過ぎないからです。

スコットランドには〈文化力〉があると言って、ほぼ間違いはないでしょう。文学的活動においては大変に活発です。アラスダー・グレイ、アーヴィング・ウェルシュ、ジェームズ・ケルマン、エイ・エル・ケネディ、ジャンス・ギャロウェイ、ジャッキー・ケイ、アリ・スミス、そしてアンドリュー・オヘイガンといった作家たちは、文芸批評家の絶賛を浴びています。また、イアン・ランキンの『リーバス警部』、アレクサンダー・マコール・スミスの『No.1レディーズ探偵社、本日開業』シリーズやその他の小説、またイアン・バンクスのSF小説など、世界的にも広く読まれています。スコットランドのケルト語、スコットランド・ゲール語は、話者は少なくともはなっていますが、ゲール語文学はルネッサンスともいえるような時代を迎えています。スコットランドのポップスは評判が高く、世界的なファンを獲得しています。また、後で述べるように、スコットランド民謡に新たな関心が向けられており、カパーケイリー、ラン・リグといったアーティストや、ジュリー・ファウラスやキャスリーン・マキンネスといった新たな才能が、スコットランド音楽、特にゲール語音楽を国際舞台で世界に発信しています。映画界の状況は不安定ではありますが、スコットランド人俳優の中には、ユアン・マクレガーやショーン・コネリーのように世界的なスーパースターとなった人もいますし、また「ロブ・ロイ」や「ブレイブハート」といった作品や、スコットランドで作られた「トレインスポッティング」や「ラスト・キング・オブ・スコットランド」といった作品は、スコットランドをテーマにしたものであり、国際的な評価を受けています。視覚芸術や演劇の分野でも最近の活動には目覚ましいものがあり、今後に期待したいところですが、時間も限られていますので、これ以上は述べないことにしましょう。

本発表の焦点は、これらの諸活動を支えている団体とメディアです。スコットランドで最近起きたもっとも重要な変化は、1999年のスコットランド議会

とスコットランド政府の設立です。大きな権限、特にスコットランド文化に関する重要な決定をする権限が、英国から、つまりロンドンの英国政府から、スコットランドに委譲されたのです。この自治権委譲は、1979年の自治権委譲の試みが失敗して以来、スコットランドにおける1980年代サッチャー政策に対する抵抗の時代を経て、30年余り続いたスコットランドの政治的「再活性化」が実を結んだものです。本発表の随所で、特に終わりの方で、この自治権委譲が文化の活性化にどのくらい寄与したのか、また英国に統合されることが、文化の活性化にとってプラスとなるのか、それともマイナスになるのか、という問題にも触れたいと思います。

公的機関：大学、ギャラリー、博物館

スコットランドには、独自の教育システムと大学があり、それがスコットランドの文化的独自性を形成・維持していると考えられています。現在スコットランドには14の大学、またその他の高等教育機関があります。大学の質で言えば、エジンバラ、グラスゴー、セント・アンドリュース、アバディーンは、世界の一流大学に名を連ねており、相当な活力を持った大学と言えます。スコットランドの大学は、イングランドの大学とはさまざまな点で一線を画しています。例えば、イングランドでは学部生は3年間で籍しますが、スコットランドでは通常4年間です。イングランドでは年間9,000ポンドという学費値上げを導入しようとしています。スコットランドでは、家計は苦しくても才能のある学生に学業の機会を提供しようという民主的教育方針の伝統から、学費値上げには断固反対しています。

しかし、これはどこの大学でも同じですが、スコットランドの大学もさまざまな問題を抱えています。高等教育の世界における激しい競争にスコットランドの大学が参加しようとする、スコットランドに関連した専門分野が周辺に追いやられてしまう、という危険があるのです。スコットランドの大学を管理し、財政的に支えているのはスコットランドの機関ですが、毎年の補助金、追加研究費の額は、一般的には英国全体を統括する機関による各大学の研究業績評価によって決められます。スコットランドの学者たちは、そのような業績評価は、大都市的な先入観が入り、純粋にスコットランド的な分野、例えばス

コットランド固有の諸言語、文学、文化の研究が低く評価されるのではないかと危惧しているのです。市場の圧力の結果、スコットランド特有の専門分野は周辺に追いやられます。さらに、イングランドの大学の学費が上がったことで、補助金に差がつき、スコットランドがその伝統的教育方針を固持して学費値上げに反対し続ければ、いわゆる「頭脳流出」が起り、有能な学者がイングランドに流れてしまうことになるのです。

そこへ、最近嬉しいニュースが入りました。スコットランド・ハイランド島嶼大学という新しい大学が創設されたのです。スカイ島に拠点を置いたゲール語教育大学、ソール・モール・オステック学寮は、その一部です。この大学は1990年代に創設され、今年には正式に総合大学として認可を受けます。スコットランドのハイランドや島嶼地方にはこれまで大学がなく、ハイランドの学生たちは何世代もの間、大学で教育を受けるために他の地方へ行かなければなりません。ハイランド島嶼大学は、今後スコットランド北部の文化的、知的活性化の重要な担い手となることでしょう。

スコットランドは英国内の一国ですから、「国立」のさまざまな文化機関から援助を受けることが出来ますし、したがって中央に従属した地方には出来ないような、素晴らしい文化施設を設立することも出来ます。スコットランド国立図書館がその良い例です。1710年の英国著作権法により、この図書館は国立図書館となりました。それはつまり、英国、アイルランドにある4つの国立図書館と同様、英国で出版された全ての文献を受領する権利を有しているということです。ここには約700万冊の本、1,400万部の印刷物、200万部の地図があり、これが重要な、文化的、知的財産であることは明らかです。

スコットランドの国立の博物館の一つ、1998年に建ったスコットランド博物館は、エジンバラ旧市街にあってひと際目立つ新しい建物です。2004年には、スコットランド・ナショナル・ギャラリーやその隣のスコットランド王立アカデミーも見事に改築され、地下に二つの建物をつなぐリンクも作られました。これまた大建築プロジェクトです。

マス・メディア：ラジオとテレビ

21世紀の今日どこでも同じことですが、技術革新の結果、スコットランド

の人々は自分が見たり聞いたりするものを、自由に選択することが出来るようになりました。とはいえ、特にテレビのような、古いタイプのメディアは、今も強大な影響力を持っています。しかし、テレビやその他の新しいメディアは、スコットランドで文化的・知的生活を送る人々に、スコットランドを発信していると言えるのでしょうか？ これについては、状況が複雑です。

英国放送協会（BBC）が、スコットランドに根差したテレビやラジオ番組の提供に中心的役割を果たしています。BBCは英国の4カ国それぞれについて情報を提供する義務があり、BBCスコットランドがBBC内の独立した部局としてその役割を担っています。BBCスコットランドは、グラスゴーにある新築の建物の中に放送局を持ち、これまた大変重要な建築プロジェクトです。しかし、BBCスコットランドは、スコットランド用のBBCチャンネルを独自に有しているわけではありません。英国全体のBBCテレビチャンネル、BBC ONEとBBC TWOを使って、スコットランドの視聴者に番組を届けているのです。この二つのチャンネルで放送される番組は、英国の他の地域で、英国全体の視聴者向けに作られているものがほとんどです。ここでは、スコットランド関係のニュースや時事問題を伝える番組以外に、スコットランド文化を色々な角度から扱った番組や、わずかですがゲール語の番組もあります。ゲール語のテレビ放送については後でまた触れます。BBC以外では、英国の三大テレビチャンネルの中で唯一、英国ITVネットワークの部局のSTVが、スコットランドにおける放送を行っていますが、STV作成の番組内容は、ITVが作成した英国全体向けの番組がほとんどです。

ラジオに関しては、BBCラジオのスコットランド向けのサービスである「ラジオ・スコットランド」が、スコットランドならではのラジオ放送を行っていると言えるでしょう。放送は朝6時から午前1時まで、BBCテレビ放送とは異なり、ラジオ・スコットランドの番組は、元来スコットランドにおいてスコットランド人の聞き手を対象に作られています。BBCにはゲール語の放送局、ラジオ・ナン・ゲール（ゲール人の放送という意味）もあります。ここでは、一週間にゲール語の放送を92時間も放送しており、ゲール語のような比較的規模の小さい少数言語にしては、驚くべき放送時間です。

BBCの二つのチャンネルやSTVは、内容的には確かにスコットランドの情報を伝えてくれていますが、それには多くの批判が、特にスコットランド国家

主義者たちからの批判が絶えません。スコットランド関係のものが不十分だという批判です。長年叫ばれている要求の一つは、スコットランドの夕食時に、英国全体や国際社会全体のニュースをスコットランド人のジャーナリストによって流してほしい、そうすることであらゆるニュースをスコットランド人の視点から取り上げてほしい、というものです。2007年のスコットランド議会の総選挙で、スコットランド国民党は次のように述べました。「スコットランドは、スコットランドで、スコットランド人を念頭に置いて作られた、今以上に質の高い番組を必要としている。BBCによるスコットランドでの番組作成は、スコットランドの視聴者が支払う番組視聴料に見合うものではなく、これではスコットランド人の有能な放送専門家がイングランドに流れ、「頭脳流出」を助長するだけだ」。

スコットランド国民党が2007年に第一党の座に着くと、スコットランド放送調査委員会を発足させ、スコットランドにおけるテレビ制作・放送の現状と産業促進の方法についての調査に乗り出しました。委員会の提案の一つに、スコットランド独自の新たなネットワークを設立するというのがあり、この提案はスコットランド議会の全ての党から支持されました。委員会は、国民党と同様、スコットランドにおける番組作成は、その予算を十分消化していないと指摘しました。その後BBCは、スコットランドにおける予算の不消化の問題を認め、それを改善すると述べました。しかしながら、スコットランドにおけるラジオやテレビ放送の状況に関して、スコットランド議会は何も変革する権限はありません。スコットランドの地方分権が進んだ今でも、放送というものは英国政府だけに権限があるものだからです。従って、たとえ委員会が何を報告しようと、それで何かが変わるという保証はありません。

そこに最近大きな前進が見られました。2008年にゲール語デジタル放送BBC ALBAが創設されたのです。一日に夕方と夜6時間半放送しています。つい最近までは、衛星放送の設備のある視聴者だけしか見ることが出来なかったため、視聴者の数は多くはありませんでした。ところが、2010年12月の決定で、今年からスコットランドに住んでいれば誰でもBBC ALBAが視聴出来るようになりました。大きな文化的進展です。BBC ALBAは字幕付きなので、ゲール語を話せる、あるいは少なくとも理解出来る僅か9万5,000人のスコットランド人だけでなく、英語しかわからない多くの人々も視聴することが出来

ようになるのです。このことは、スコットランド人の視点で作成された、スコットランド独自の番組を求める聴衆が存在するということを意味しています。

文芸、祭典、舞台芸術

スコットランドには、多種多様な、活気みなぎる文芸の祭典があります。近年、文芸祭は数も規模も大きくなっています。これが「文化の再活性化」なのか、単にエネルギーに溢れているだけなのかは重要ではありません。注目すべきは、スコットランドの文芸祭は概して健全である、ということです。エジンバラ・フェスティバルは、いくつかの祭典の集合体なのですが、これが良い例です。エジンバラのフェスティバル・フリンジは、今や世界で最大規模の芸術祭です。もう一つの祭り、エジンバラ国際ブック・フェスティバルも、世界最大規模のものになりつつあります。ここに世界中の現代作家がやってくるのですが、同時にスコットランド作家たちにとっては、プロ作家への登竜門となっています。

今日、スコットランドの書籍文化が健全であるということは、スコットランドの他の地域の文学祭を見てもわかります。例えば、1999年にアバディーンに始まった「ワード・フェスティバル」、2005年にグラスゴーで始まった「アイ！ ライト」祭があります。それにスコットランドの比較的小規模な町でも、各地域の素晴らしい文学祭が行われています。例えば、ハイランド西部の「ウラプール・ブック・フェスティバル」、アウター・ヘブリディーズ諸島の「アイランド・ブック・フェスティバル」、「ウィッグタウン・フェスティバル」や「ボーダーズ・ブック・フェスティバル」がその例です。

演奏・演劇関係ではどうでしょう？ スコットランドには、英国の中の一国であるということから、さまざまな国立の楽団が存在します。例えば、スコティッシュ・オペラ、ロイヤル・スコティッシュ・ナショナル管弦楽団、スコティッシュ室内管弦楽団や、BBCスコットランド交響楽団。さらにスコティッシュ・バレエは極めて質の高いバレエを演じています。最近（2009年）グラスゴーにあるトラムウェイ・インターナショナル・アーツ・センターに移転しました。

ここで、スコットランド議会と政府によるスコットランド文化政策への貢

献について簡単にまとめてみましょう。2000年の8月に、「スコットランド政府」は「スコットランド文化戦略」(National Cultural Strategy)を立てました。その提案の一つに、国立の劇団を創設する、というものがありません。2006年にはナショナル・シアター・オヴ・スコットランドが創設されました。彼らは本拠地を持っていないのですが、スコットランド全域はもちろん海外にも巡業しています。

最後に、スコットランド伝統音楽について一言申し上げます。1892年以来、毎年10月にハイランド各地で行われるゲール語文芸祭典、ナショナル・モッドでゲール語の歌が歌われますが、近年になって、スコットランド伝統音楽に新たな関心が集まっています。他の分野で、これほど文化活性化が顕著に見られるところはないのではないのでしょうか。この動きを背後から支えてきたのは、政府からの援助を受けつつ、何千というスコットランドの若手音楽家に伝統音楽を指導してきた、多くの草の根的な活動家たちでした。特に重要なのがゲール語「フェション」運動です。最初の「フェッシュ」、すなわち「ゲール語音楽祭」は、1981年にヘブリディーズ諸島のバラで行われました。同様の音楽祭の数は今では43にのぼり、ハイランドやその他の地域で行われています。

近年になって、伝統音楽を専門に教える学校が創設されており、ハイランド西部のプロクトン高等学校の中に作られた「伝統音楽専門教育センター」などはその良い例で、伝統音楽だけでなくその他の舞台芸術方面でも多大な成果を上げています。これらの学校は、先に述べた2000年の「スコットランド文化戦略」の成果の一つです。古典音楽、演劇、舞踏を教える芸術学校である王立スコットランド舞踏演劇アカデミーでは、1990年代以降、スコットランド伝統音楽に関しても学位を出すようになりました。これも伝統音楽に対する関心と敬意の表れと言えるでしょう。

伝統音楽が活発なのは、それを披露出来るイベントが用意されているということもあります。例えば、1994年にグラスゴーで始まったケルティック・コネクション・フェスティバルは、世界最大規模の伝統音楽とワールド・ミュージックの祭典のひとつに数えられています。1996年に始まったヘブリディーズ・ケルト音楽祭も大きなものです。同じ1996年にはナショナル・バグパイプ・センターもグラスゴーに設立され、現在ではバグパイプ博物館もその中にあります。スコットランドのもっとも有名な伝統楽器であるバグパイプもまた、

大いに再活性化されているというわけです。

映画、音楽、出版業界について

映画産業については、スコットランド出身の俳優やスコットランドに題材をとった作品は多いのですが、特にスコットランドの得意分野というわけではありません。スコットランド人監督ビル・フォーサイスの「グレゴリーの一生」や「ローカル・ヒーロー」が国際的評価を得たのも、もう30年ほど前の話です。1997年に、いくつかのエージェントが合併した末「スコティッシュ・スクリーン」が設立され、スコットランドにおける映画、テレビ制作を援助していましたが、「クリエイティブ・スコットランド」に吸収されてしまいました。スコットランドの映画産業は、他の国々と同様に、さまざまな問題に直面しています。例えば、国内の資本が不足していること、地域に根差した題材を映画にしても十分な興業収入を見込めない、といった問題です。スコットランド議会には税制に関する権限がまったくないため、いくつかの国で行われているような税制上の優遇策を取ることも出来ません。

「音楽業界」も同じような問題に直面しています。概して、スコットランドのレーベルは規模が小さく、あまり長続きしません。ところが、いくつかの事業は成功しており、市場の中で活動の場を得ています。スコットランドの伝統音楽への関心が集まることによって、レーベルのその分野での活動が容易になったのです。その良い例が1986年に設立されたグリーントラックス・レコーズで、スコットランド音楽やケルト音楽を専門にしています。また1989年に設立されたスカイ島を本拠地とするマクメムナは、ゲール語音楽が専門です。

出版業界も同様の問題に直面しています。が、大企業が見落としがちな穴場産業を求めて、小さな出版事業が活発に展開しています。エジンバラに拠点を置いた有限会社バーリンは1992年に設立されましたがスコットランド関連の出版物で成功し、またスコットランドの古書などの再版といったサービスもしています。大学所属の出版局はほとんどが消えてしまいましたが、エジンバラ大学出版局だけは国際的な地位を保持しています。もうひとつの成功例は、キャノンゲイト・ブックスです。最初はスコットランド関連の本を中心に事業

を行っていましたが、1994年からは、世界の読者を対象としたより一般的な書籍の出版を始めました。例えば、カナダ人作家ヤン・マーテルの小説『パイの一生』の出版は大成功を収めました。

言語、その他の無形文化財について

スコットランドの主要言語は英語です。ただ、その英語にはスコットランド特有の訛りがあり、スコッツ語というスコットランド独自の言語から来た単語、フレーズ、言い回しが散りばめられています。

スコッツ語とゲール語はつい最近まで、国家の無関心と敵意に満ちた政策に苦しめられてきました。英国やスコットランドの権力者は、これらの言語を軽蔑のまなざしで見えており、スコッツ語などは、単に「汚い英語の訛り」としか見ておらず、豊かな文学を持つ由緒正しい言語とは考えておりません。両言語とも、教育システムから排除されてきました。ですから、ここ数世紀にわたって、ゲール語話者が激減しているとしても驚くには当たりません。1891年には25万人もいたゲール語話者が、現在ではわずか5万8,000人しか残っていません。英国国勢調査でも、スコッツ語に関する質問がなされたことはこれまで一度もないので、現在どのくらいの話者がいるのかすらわかりませんが、おそらく150万人程度がスコッツ語を使うと推測されています。2011年にはスコッツ語に関する質問が国勢調査に取り入れられることになっています。

この25年間で、ゲール語への政策が変わってきており、スコッツ語の政策も変えようという動きも見え始めています。1985年にゲール語を使用言語とした初等教育が初めて導入され、今では、そうしたゲール語学校がスコットランドには60校あります。その中の二つはすべてゲール語で教育をする学校で、一つはグラスゴーに、一つはインヴァネスにあります。ゲール語学校に通う生徒数は現在2,256人です。前にも述べましたが、今はゲール語テレビチャンネルやラジオ放送もあります。1999年、英国は「欧州地域語少数言語憲章」を批准しました。これは、ゲール語とスコッツ語に関する義務をスコットランド各機関に課す、重要な「欧州評議会」条約です。いまさらですが、スコットランド議会は2005年に「スコットランド・ゲール語法」を可決しました。これにより「ゲール語委員会」が設立され、公的機関はゲール語に関した計画を立

てることを義務付けられました。ゲール語を通じた諸サービスをどのように行い、どのようにゲール語を保護するのかを報告する義務を負うことになったのです。

スコッツ語に関してはそのような動きは見られません。しかし、2007年に第一与党となったスコットランド国民党は、スコッツ語の保護促進の政策にも注意を向けていました。2009年にスコットランド政府は「スコットランドにおけるスコッツ語の現状調査」、2010年には「スコッツ語についての意識調査」という調査結果を発表しました。政府の設立したスコッツ語に関するワーキング・グループが昨年11月に報告書を発表しています。政府がこの報告書をどう取り上げるかは定かではありませんが、スコッツ語への関心が芽生え始めているようですし、2011年の国勢調査の結果が、その関心に拍車をかけることになるだろうと思います。

結論としては、スコットランドの少数言語の話者人口はかつてなく減少しているものの、これらの言語に対する政府の政策には明確な変化が見られるということです。ここにも文化的再活性化が起きているということが出来るでしょう。

最後に、スコットランドの無形文化財について一言申し上げます。スコットランドにはヨーロッパでも有数の豊かな民謡の伝統があります。1951年にエジンバラ大学に設立された「スコットランド研究学部」の調査により、ゲール語、スコッツ語の歌、口承伝説、民間伝承が録音され、またBBCを含む他の機関も調査活動に取り組み、多くの文化遺産が保存されています。1990年代に始まったトベルアンドウオル・ヒッシュ（伝統の泉）／キストオリッチズ（富の箱）・プロジェクトによって集められた資料の多くがデジタル化され、昨年11月以降はウェブ上で公開され、世界中の人々がアクセス出来る状態になっています。これらの資料は、伝統音楽の再活性化に大きな役割を果たしています。というのも、若いミュージシャンが歌の素材やインスピレーションを求めて、これらの資料に目を向けるからです。最新技術のおかげで、これらの資料は学校やその他の教育、訓練機関で容易に用いることが可能になっています。

結論

今回の調査から言えることは、現代スコットランドには、文化の再活性化が起きているということです。この活性化が起きた時期は、スコットランドの地方分権化と、スコットランド議会政府の創立に向けた長い政治運動と時期を同じくしています。文化活性化は、これらの政治運動の結果として生じたのでしょうか？ これは大変難しい問題です。それよりも、イングランドに飲み込まれるという危機感がより大きく作用したとは言えないでしょうか。サッチャーの時代に、ロンドンで作られた政策が、スコットランド人の感情を無視したものであると多くのスコットランド人が感じていました。このことが、スコットランド人により強い自己主張が必要であると感じさせ、文化的、政治的活力へと導いたとは言えないでしょうか。

地方分権によって、地方文化が活性化されるのかという問題は、まだ議論の余地のある問題です。地方の諸機関は、自治を獲得したとは言え、例えば放送といった重要な問題には手を付けることが出来ません。手を付けることの出来る問題、例えば大学運営に関しても、選択肢は限られています。しかし、地方分権の後、スコットランドの諸言語、とりわけゲール語に関しては、明らかな進歩が見られます。すでに述べましたように、2000年のスコットランド政府による「スコットランド文化戦略」はいくつかの重要な成果を生み出しました。それ以外の分野では、どうなっているのか、はっきりとは言えません。議論は多くなされていますが、実行されたものは少ないのです。

例えば、スコットランド議会の創立後、文化を専門に担当する委員会が作られ、重要な報告がなされていますが、これらのうち法制化されたものはほとんどありません。2004年にスコットランド政府が文化促進委員会を設立し、政府のスコットランド文化問題への対処の仕方を見直しています。2005年の委員会最終報告は大変長く、広範囲に渡るものでした。これに対しスコットランド政府は、2006年に新たな文化政策「スコットランドの文化」を発表し、同じ年にその政策を補完するために、「スコットランド文化法案」について協議を始めました。ところが、結局法案は一つも作成されず、唯一議会での法案化までこぎつけたのは、スコティッシュ・スクリーンと、文化的諸活動、諸機

関のための基金団体、スコティッシュ・アーツ・カウンシルの合併、そして新たな団体、スコティッシュ・クリエイティヴの設立のみです。2010年に設立されたスコティッシュ・クリエイティヴの主任、アンドリュー・ディクションは大変精力的で明確なヴィジョンを持っています。しかし、この機関がどれだけスコットランド文化生活に貢献するかは予断を許しません。けれども本日取上げたさまざまな進歩を考えると、私たちはスコットランドの文化に明るい未来を見出すことが出来るのではないかと思います。ご静聴有難うございました。

(訳：小池剛史)